

氏名	関谷一彦
学位の専攻分野の名称	博士（言語コミュニケーション文化）
学位記番号	乙言第5号（文部科学省への報告番号乙第390号）
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2020年2月22日
学位論文題目	リベルタン文学とフランス革命
論文審査委員	（主査）教授 田村和彦 （副査）教授 藤田友尚 教授 上田和彦 大橋完太郎（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

論文内容の要旨

関谷氏は長年にわたってフランス文学、特に18世紀の啓蒙期の文学の研究に取り組んできた。氏が対象としてきたのは、ルソー、デイドロ、そしてとりわけ異端的な思想家マルキ・ド・サドである。サドに関してはその奔放な自由思想を「性（セクシャリティ）」とエロティズムから解析する研究を行ってきて、自らの手でもサドの小説『閨房哲学』の新訳を2014年に人文書院から上梓している。近年は文学に限らず、本邦のポルノグラフィーやエロティック版画など、フランスに限らない表象芸術にも比較文化的な関心を広げつつある。

今回提出された著書『リベルタン文学とフランス革命』（2019年刊、関西学院大学出版会）において関谷氏は18世紀啓蒙期のエロティック文学への関心を、フランス革命の歴史的・思想的起源という、より普遍的なテーマへと拡大している。表題にある「リベルタン」とは、「自由思想家」を意味するフランス語であるが、17世紀以降キリスト教思想からの逸脱を意味するようになり、やがて性的な「放縦」「放蕩」「卑猥」、またその性質をそなえた者を意味するようになる。関谷氏が注目するのはフランス革命に先立つ18世紀前半からその中盤にかけて、性的放蕩を賛美するリベルタン文学が大量に、しかも非合法的に流通する事実である。これはアメリカの歴史家ロバート・ダーントンの『禁じられたベストセラー—革命前のフランス人は何を読んでいたか』や『革命前夜の地下出版』にヒントを得た着想であるが、ダーントンの危険思想や哲学書、地下出版の禁制書の流通を扱っているのに対し、関谷氏はこの著作で性を直接のテーマとしたリベルタン文学に焦点を絞り、それが「フランス革命をどのように準備したか」を追究する。

9章からなる本書の第一章では「フランス革命の起源」の問題へのアプローチが、ダニエル・モルネ、ロバート・ダーントン、ロジェ・シャルチエらの先行研究を手掛かりに試みられる。ここではまず、関谷氏の立場がシャルチエによる、読者によるテキストの受容とその内面化（アプロプリアション）の探求にあることが予示される。第二章では、「リベルタン文学」について、その起源、定義、影響が包括的に論じられる。それが「哲学の世紀」と同時に「快楽の世紀」であるフランス18世紀を風靡した「性を内包した、反逆的な文学」という定義は本書の出発点をなす。第三章から第五章までは、リベルタン文学の具体例が取り上げられ、分析を施される。すなわち、このジャンルの嚆矢とされるクレヴィヨン・フィスの『ソファ』（1742）やデイドロの『不謹慎な宝石』（1748）、さらに「18世紀で最も猥雑である」とされるジュルヴェール・ドゥ・ラトゥシュの『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』（1741）および、作者不詳の『女

哲学者テレーズ』(1748)である。それぞれのテキストは本邦初訳のもので(後者についてはやはり関谷氏による翻訳2010年に人文書院から上梓されている)、その語法といい、性をあからさまに取り上げた過激な内容といい、リベルタン文学の衝撃を伝えて余りある。特に、哲学的議論と性描写が交互に登場する『女哲学者テレーズ』については、その唯物論的な世界観と共に、想定される同時代の読者について踏み込んだ分析が行われている。本書の核心といえる章であろう。

第6章では、18世紀後半、特にフランス革命が開始されてから大量に流布した政治的な中傷パンフレットが取り上げられる。マリー・アントワネットの性的放縦や、ルイ16世の性的不能を標的にした中傷目的の過激なパンフレットについては、これまで図版としては広く知られていたが、ポルノグラフィを思わせる露骨なテキスト(「シャルロとトワネットの恋」および「ルイ16世の妻であるマリー・アントワネットの色情狂」そのものの訳を試みているのも本書ならではといえる。第7章では、リベルタン文学の真骨頂であり、実際にはその終着点となったマルキ・ド・サドの『閨房哲学』(1795)が正面から取り上げられ、その思想的背景および系譜が解明される。サド研究者である関谷氏には『閨房哲学』の翻訳もあるが、その研究上の蓄積が十全に活かされた章といえよう。この著作に流れ込んでいるルソー、ヴォルテール、ビュフォン、ドルバック、モンテスキュー、ホブズなどの思想的な系譜が解明されていることも説得的である。キリスト教や王権を徹底的に批判し、そのモラルを断罪するサドのテキストは、リベルタンという語が持つ反逆性を最も見事に体现するもので、その過激さに肩を並べる作品は以後見出し得ない、とされる。本研究のもう一つユニークな点は、テキストに添えられたあからさまな性表現を伴うポルノグラフィ的な挿絵にも関心が向けられていることで、それは文字以上に読者の性的な欲望や妄想を刺激する上で効果的であったとされる。8章ではリベルタン文学に付された多数の版画が直接取り上げられ、エロティックな挿絵に対する図像学的な分析が行われている。これはフランス革命の起源の問題とは直接にはかかわらないものの、図像による性的欲望の喚起、性描写のコード化、「覗き見る」視覚の重要性、即物性や逸脱による笑いの問題などが、日本の春画と対比して分析され、東西の性意識の違いが浮き彫りにされていることが興味深い。

このように、挿絵を含め、通常、文学的な価値が低いとされる「性」を扱った出版物が、なぜこの時期に大量に流布し、民衆に訴えるどのようなインパクトをそなえるに至ったかが本論では分析されるが、そこから浮かび上がるのは、「啓蒙と理性の世紀」とされる18世紀が、同時に個人の自由と解放を大胆に謳い、物質的世界を強く肯定する「快楽の世紀」でもあったという歴史的な見取り図である。関谷氏によれば、リベルタン文学のフランス革命への直接的な影響を指摘することは難しい。しかし、宗教の規範をのがれた個人の「今、ここでの幸福」を大胆に肯定するこれらの文学が、人々の関心を現実世界に向けさせ、宗教的・政治的権威を批判する新たな「公衆」を生み出したことは確かだ、とされる。「フランス革命」という政治的な変動の根源に、「性」や欲望、個人の自由と宗教に関する意識の大きな変容をさぐるという関谷氏の見解はここに要約されている。

論文審査結果の要旨

評価に先立って本論文の特筆すべき点を3点挙げる。第一に、18世紀フランス文学でも特殊な位置づけをされているリベルタン文学の定義を試みていることである。リベルタン文学がフランス革命の起源の一端としていかに作用したかについて、本論文では議論を尽くされず判然としないことは残念ではあるが、リベルタン文学の簡潔な定義を提案し、その政治的な影響力について考察を行っていることは評価できる。次に、フランス革命前に多く出版された、王権批判を目的とした政治パンフレットの翻訳が示されていることは、日本におけるフランス18世紀文学研究を前進させる一助になる。これは関谷氏のこれまでの訳業を引継ぎながら、さらに新たな方向への展開を予測させるものである。最後に、「春画」とリベルタン文学作品のエロ

ティックな挿絵との比較がなされ、「性」の表現と受容における日仏両文化の差異が明快に指摘され、比較文化学の領域での知見を深めることに貢献している。一方で、社会と性、政治と性という根幹をなすプロブレマティクについては、バタイユの「逸脱・侵犯」理論は考慮されているものの、性的欲望についてフーコーの行ったより重要な転回を考慮していない憾みがある。

「リベルタン文学はフランス革命に何らかの影響を与えたか？ 与えたとするならどのような影響か？」という問題を設定した関谷氏は、なぜフランス革命が起こる以前に「性」と「哲学」が結びつくリベルタン文学が流行したか、また、そもそもなぜ18世紀において、「性」と「哲学」に批判が結びつくようになったかを明らかにしようとする。哲学と思想がフランス革命に与えた影響についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、性と哲学が一体になったリベルタン文学が革命に与えた影響についての研究はきわめて少ない。関谷氏が18世紀における性と快楽に注目して、リベルタン文学だけに絞って問題を設定している点は評価できる。また関谷氏は通常の歴史研究とは異なるアプローチを取り、あくまでもリベルタン文学のテキストを読み解くことによって革命への影響を読み取ろうとする。このような文学研究のアプローチに徹する姿勢、すなわち、リベルタン文学を読む読者がリベルタン文学から何を読み取り、何を内面化したかを問おうとする姿勢も評価すべきである。

そのような姿勢で関谷氏は、リベルタン文学の代表作を詳しく紹介し、作者たちが読者の性的欲望を掻き立てるだけでなく、宗教・政治批判、そして唯物論哲学に関心を持たせようとしたことを明らかにする。そのうえで、そのような作者が想定していたであろう読者層を「仮想の読者」という作業概念によって固定し、「仮想の読者」が、フランス革命に影響を与える何を読み取ったかを推定していく。ここで採用されている「仮想の読者」という作業概念は有効であり、「仮想の読者」は性的描写だけでなく、キリスト教が説く性的モラルに対する批判や王政に対する批判、さらにはそのような批判の基礎となる哲学にも関心を示したとする考え方は説得力がある。しかしながら、「仮想の読者」がリベルタン文学で示される批判的視線や哲学的教説をどこまで内面化し（あるいは身体化し）、どのように革命へとつながったのかについては著作中ではそれほど詳述されていない。リベルタン文学がフランス革命に及ぼした影響について「間接的であるにしても、大きなものがあった」と結論づけられるのだが、むしろ「間接的」な影響についてより踏み込んだ考察が期待される。

関谷氏による提出論文『リベルタン文学とフランス革命』は、フランス18世紀において数多く出版されたリベルタン文学の代表的な作品を対象としたものである。該当ジャンルの作品は、近代のポルノグラフィの発祥の一つとされているが、こうした刊行物が単なる性愛描写の消費だけを目指すものではなく、時代に対する風刺と新しい世界観や体制を思考する哲学的考察に満ちたものであり、フランス革命という世界史的な事件を準備したものであるというのが論者関谷の主張である。こうした主張はフランス革命をめぐる文化史・思想史における中心的話題としてフランスにおいても展開されてきたものであり、関谷氏の考察はそうした系譜の先端に位置づけられるものである。

フランスでは1990年代以降、リベルタン文学の存在がまずフランス思想史において重要視され、アカデミックな編者の校訂を経て多くのものが活字化されて刊行された。氏の研究はこうした近年のフランス本国の最先端の研究成果を踏まえたものである。とりわけ日本における研究の文脈では関連領域の学術的な関心が社会や政治思想の分析に重点を置いていた点を関谷氏は批判的に捉え、むしろポルノグラフィ的な力と政治思想・哲学的考察との交点に革命的な力の源を見だし、それを浮かび上がらせようとしたことに氏の考察の大きな貢献がある。ヴォルテール、デイドロといった高校の教科書に掲載されるレベルの著名な「啓蒙思想家」たちと、マルキ・ド・サドやその他匿名作家による猥褻描写を盛り込んだ地下作品とのあいだに共通性を認め、そこに革命を起動させた「世論」の存在を提示する点において、関谷氏の研究が社会と文化の深層関係をえぐり出し、現在の日本という遠く離れた状況に対してもきわめて問題提起的な議論を示すことに

成功している。他にも18世紀当時の日本における春画と当時のポルノグラフィーとの比較考察の章においては、全体から見て附論的な位置にあるにもかかわらず、性愛が文化的コンテンツとして成立する共通図式・共通の眼差しを探る試みとして興味深い。

なお、該当論考に対しては、フランス革命史の歴史学における2000年以降のフランスでの動向を反映させることができればさらに氏の議論の説得性が増すであろうといった点や、ポルノグラフィーの猥褻さの説明が場所によっては定型的であるなどの点において批判が可能ではあるが、こうした指摘は上にあげたこの論考の積極的な意義をいささかも損なうものではなく、むしろ氏の今後の研究においてさらに明解な知見のもとに解析され、あらたな文化的歴史的視点を提供するきっかけになる要素であろうことは疑い得ない。

以上の通り、四人の審査委員は多くの観点から見て、関谷氏の著書を博士論文として受理するに値するものであると一致して判断した。